

9/25/04

360°

フォトジャーナリスト

宇田 有三

「お帰りなさい。日本に帰ってきて、ホッ、としたでしょう。いいなあ、私も、不認定の取り消しを求めて早く自分の国に帰りたいですよ」

在日ビルマ人のMさん(三六)を訪れた。彼は現在、難民控訴中の身である。昨年四



慢性的な電力不足は解消されない。  
毎夜、ロウソクの下で勉強する子どもたち (ビルマ、2003年9月)

## 42年続く軍政

三カ月の中米取材から帰ると、電話口から懐かしい声が聞こえてきた。声の主は、名古屋に住んでいる在日ビルマ(ミャンマー)人のKさん(三六)。相変わらず流ちょうな日本語。彼が難民認定を受けたのは二年前。今はアルバイトで生計を立てながら、自国の状況を日本の人に伝える活動をしている。

九月の半ば、大阪に住む

月、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)から難民認定を受けた。それなのに、日本の裁判所はそれを認めようとしな

「裁判記録を取っている」。裁判記録を読んでみると、日本におけるビルマの現状が全く伝わっていないことに愕然と

「頑固なスーチー氏の態度を強調しようとする。だが、実際の対話をしようとする

展開によっては、本国へ強送還という怖れがある。

「ミャンマーは今なお軍

軍事政権を褒めそやす人は簡単に、「マスコミは善、軍事政権は悪」という

「ミャンマーは今なお軍

「善、軍事政権は悪」という

「善、軍事政権は悪」という

外国の指摘を受けて、人権問題の改善に前向きな姿勢

「善、軍事政権は悪」という

「善、軍事政権は悪」という

国の貨幣価値は十年前に比べて一〇分の一近くまで下がった。軍政は四十二年も続いている。これがこの国の現実である。

ビルマ国内に住みながら、援助活動をしている知人から連絡があった。「ここに属さない外人の私でもはらわたが煮えくり返るのですから、ここの人々の心の中は、どんなものでしょうね。感情を抑えて生きていくのでしょ」

日本国内にも、ビルマ軍政と繋がりながら援助を続ける、一部の個人やグループがある。だが、その援助は、本当に現地の人々のために役立つのかどうか。訪問者として、強い「円」を持ってこの国を訪れる。良い面しか見せようとしな

いビルマ人に取り囲まれては、恐怖に縛られてきた人々の生活が見えてこないの